

解答は別紙の解答欄に記入しなさい。

I 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を入れ、下線部（1）～（5）に関する各設問に答えなさい。

プロイセン軍人クラウゼヴィッツは、若き副官時代にフランス軍に敗れ、捕虜としての生活を送った。かつてフリードリヒ大王のもとで精強を誇ったプロイセン軍が完敗したことを嘔みしめて、そののち彼は「戦争とは何か」と問い直さざるをえなかった。没後にまとめられた『戦争論』において、クラウゼヴィッツは新しい戦術や装備、さらにナポレオンの軍事的天才などという説明で済ますことなく、根本から戦争の本質を考察しようとしている。

彼が体験したのは、変容した戦争であった。革命を打倒しようとする列強に対抗して、フランスは、アメリカ独立戦争にも参加した自由主義貴族（ A ）を司令官にして、1789年に軍隊を組織しようとしたが、旧来の将兵は戦意に乏しかった。むしろ訓練も不十分であった⁽¹⁾「軍事のしろと」が予想を超えた強さを示した。フランス砲兵の機動力や威力などに加え、奮戦する義勇兵の存在は列強を驚かせた。さらに⁽²⁾1806年にフランス軍がプロイセン軍にイエナおよびアウエルシュテットの戦いで決定的な勝利を収めたことは、近代的な徴兵制を各国に広めるきっかけとなった。この制度そのものは以前から知られていたものの、士気と錬度が低く、厳しい軍規で律しても、その効果はあまり評価されていなかったのである。貴族などが主力となって限られた武装で戦われていた戦争が、ナポレオン戦争以降、徴兵され士気を高められた数十万もの兵員と大火力が衝突する場となったのである。

19世紀に自然科学が飛躍を遂げたことも、戦争を激変させた一因である。産業革命期の製鉄法の進歩によって強くて安価な鉄鋼が大量に供給されるようになったが、これは信頼性の高い橋梁や線路を生み出しただけではない。たとえば後発のティッセン家などとともに、ドイツの鉄鋼生産量を大きく増加させた（ B ）＝コンツェルンは同時に高性能の武器を大量に供給し、その総帥アルフレートは「大砲王」と綽名された。また石油と電気を中心とする技術革新は化学繊維や染料、肥料などの多種の製品を生み出したが、化学の発展は兵器も進歩させた。鉱山採掘や土木工事を容易にするダイナマイトを発明したスウェーデン人（ C ）は無煙火薬の性能を向上させて巨富を築き、空気中の窒素を用いて肥料などに使うアンモニアを合成する方法を考え、ドイツの科学者ハーバーは致死性のガスを兵器として開発した。

30か国以上が交戦した第一次世界大戦は、その広がりや兵器の発達により、かつてない規模の戦禍をもたらした。西部戦線では、1914年にフランス・イギリス軍がドイツ軍の進撃をくいとめたパリ東方での（ D ）の戦い以降、塹壕が掘られ、長期戦となった。さらに1915年のイープリの戦いは、ドイツ軍によって致死性のガスが使用されたこともあり、数多くの戦死傷者を生み出した。レマルクの小説『西部戦線異状なし』に描かれているように、砲撃のなかで多くの将兵が斃れ、たとえ生還できたにしても、人間性を否定されて心に深いトラウマを負ったのである。

このような戦争を遂行するためには多くの人員と物資が必要で、国の総力を挙げなければならな

かった。これを「総力戦」という。勝ち抜くために反対政党を加えて政府を構成する挙国一致体制がつくられた。たとえば⁽³⁾イギリスでは1916年に自由党の（ E ）を首相とする内閣が成立し、戦争を指導した。だが政治的対立を一時的に棚上げし、経済力を総動員するだけでは十分でなかった。国民の士気を高め、敵国に対する世論を刺激しなければならなかったのである。すでにホーエンツォレルン家の傍系をめぐる（ F ）王位継承問題に関して、1870年にプロイセン首相ビスマルクは電報を改竄して、プロイセン＝フランス戦争を起こさせており、その後も国々のあいだの感情は操作された。フランスは、プロイセン＝フランス戦争の敗北によって、アルザス・ロレーヌ地方を奪われたことが忘れられなかった。ドーデが著した短編小説『最後の授業』には、この無念さがよく表れているとされるが、彼は意図的にフランス支配を美化して、フランス人の愛国心を刺激したとされる。

また世論が参戦の決定に大きく影響を与えるようになった。第一次世界大戦においてアメリカ合衆国は当初⁽⁴⁾中立の立場をとっていたが、イギリス船（ G ）号がドイツ潜水艦によって撃沈され、乗船していた多くのアメリカ市民が犠牲になると、アメリカ世論は沸騰し、⁽⁵⁾アメリカ合衆国が参戦する一因となった。

ドイツなどの同盟国側の敗北によって第一次世界大戦は終わったが、戦争は敗者だけではなく勝者にも大きな打撃を与えた。イギリスは勝利を収めたものの、経済的に大きな打撃を受け、不況に苦しんだ。失業者が増加し、労働組合が力を増した。そのような状況で、選挙法の改正も影響して、政権交代がなされ、1924年に（ H ）が首相となって最初の労働党内閣を組織した。また戦争によって100万人以上の死者を出したフランスは、アルザス・ロレーヌ地方を取り戻したが、ドイツへの報復を求める世論を受けて、ドイツのGNPをはるかに超える賠償金を要求した。だが、それが履行されなくなると、1923年に（ I ）が首相を務めるフランスは賠償の担保としてドイツ鉱工業の中心であるルール地方を、短期間とはいえ、武力占領するにいたった。

一方、敗戦国ドイツでは、莫大な賠償金支払いの影響を受けて、ハイパーインフレーションが生じた。紙幣は紙屑のような価値しかなく、パンを1つ買うにも紙幣を額面ではなく重さで計る必要があるほどだったという。国際協調の試みもなされたが、次第にヒトラーが台頭していく。彼は、その主著『（ J ）』において、傷ついたドイツ人の誇りをかきたて、その「生存圏」拡大を標榜する一方で、反ユダヤ主義を主張した。ナチ党はひろく支持者を集め、政権を奪取することに成功したが、それには巧みな宣伝と大衆運動が力を発揮した。1936年のベルリンオリンピックは、そのようなプロパガンダの威力を示す一例と言えるだろう。ヒトラーとナチ党はドイツ民族の優秀さと自らの権力を誇示するために総力を挙げて準備し、洗脳的とさえ言うような派手な演出を駆使した。オリンピック最初の聖火リレーや、リーフェンシュタールのオリンピック映画は、その代表的な例である。ナチ党は反対者やユダヤ人を迫害し、文化統制や教育を通じて、画一的な全体主義国家を建設したのである。

さまざまな勢力が持てる限りの物資と手段を投入し、さらに感情に訴え、大衆運動を駆使した末に突入した第二次世界大戦は、5000万人を超えともいわれる死者を出し、はかり知れない物的損害を生じさせた。原爆や無差別爆撃など、それまでの戦争の常識を超えた様相を示したが、その爪跡は

ヨーロッパだけでなく、アジア、アフリカ、太平洋など、世界中の多くの地に今も見ることができる。だが現在、社会や科学技術、そして戦争はまた大きく変わろうとしている。ミサイルのような大量破壊兵器だけでなく、ドローンのように簡単に軍事利用できるものも現れた。SNS が広まり、フェイクニュースが力を増すなど、メディア環境も一変した。戦争とは何か、真剣に考えるべき時代が訪れている。

設問（１）1792年に義勇兵などからなるフランス軍がプロイセン・オーストリア軍を退却に追い込み、ゲートに「この日、この場所から世界史の新しい時代が始まる」とまで言わしめた戦いは、フランスのどこで行われたか。

設問（２）イエナの戦いに先立つアウステルリッツの戦いで、ナポレオンに敗れたロシア皇帝は誰か。

設問（３）当時の反ドイツ感情を受けて、イギリス王ジョージ５世は王朝名（家名）を何と改めたか。

設問（４）19世紀前半に、アメリカ合衆国大統領は、西半球に対するヨーロッパ諸国の植民地主義と干渉を否定すると同時に、自らはヨーロッパ内部の問題に干渉しないとするアメリカ外交の基本路線を発表した。この大統領は誰か。

設問（５）アメリカ合衆国がドイツに宣戦布告したのは何年か、アラビア数字で記しなさい。

Ⅱ 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ G ）に最も適切な語句を記入し、下線部（1）～（8）に関する各設問に答えなさい。

北アフリカの中央に位置するチュニジア共和国の地は、古来、交通の要衝であり、地中海交易やサハラ砂漠越えの交易によって繁栄を享受してきた。首都のチュニスの北東に位置するカルタゴは、前9世紀にフェニキア人の港市国家である（ A ）市の人々によって建設された。フェニキア語で「新しい都市」を意味するこの植民市の国家は、前6世紀に西地中海の通商圏に大きな影響力を及ぼすようになり、⁽¹⁾コルシカ島、サルデーニャ島、イベリア半島などへ勢力を拡大し、さらにはシチリア島へも支配を及ぼすまでになった。こうしてカルタゴは前3世紀に地中海世界で最大の商業中心地の一つとなったのである。しかし、シチリア島の領有などをめぐってローマとの間に3次にわたるポエニ戦争が起こり、結局、前146年にカルタゴは大敗を喫し、徹底的に破壊されてしまった。その後、ローマ植民市として再建され、ローマ帝政期には司教のいる都市となって、キリスト教文化の拠点としての新たな性格を帯びることになった。カルタゴの後背地のヌミディアに354年に生まれ、古代キリスト教最大の教父ともいわれ、その思想がスコラ哲学に多大なる影響を与えた（ B ）は、若い頃にカルタゴで学び、西アジアを起源とする⁽²⁾マニ教にも傾倒した。5世紀になると、東ゲルマン人の一派であるヴァンダル人の王ガイセリックがこの地を征服し、そこにヴァンダル王国を建設した。しかし、同王国は534年、ビザンツ帝国のユスティニアヌス大帝が派遣した大軍によって攻め滅ぼされ、広大なその地中海帝国の中へと吸収されることとなった。

640年代以降には、アラビア半島に発するイスラーム勢力による大征服活動がこの地にも及んできた。チュニジアを中心とした地域は、アラビア語で「イフリーキヤ」と呼ばれた。それはラテン語の「アフリカ」に由来する。そして、イフリーキヤは、「日の没する場所」を意味する⁽³⁾マグリブの東部地域に相当する。この地の本格的な征服は、ウマイヤ朝の軍司令官のウクバによって実現された。エジプト征服の軍に父親と共に参加した経験をもつとされるこのアラブの征服者は、リビアから西方へと軍を進め、北アフリカのビザンツ帝国領を奪い取っていった。そして、670年にはカイラワーンを⁽⁴⁾ミスルとして新たに造営し、この内陸都市をイフリーキヤにおけるウマイヤ朝の支配拠点として整えた。ウクバはまた、観光や参詣の対象として今日でも重要なカイラワーン大モスクの礎を築いたことで知られる。

750年に成立したアッバース朝は、コルドバを首都とする（ C ）朝の支配下に入った⁽⁵⁾アンダルスを除いて、ウマイヤ朝の広大な領土の大部分を引き継いだ。こうしてイフリーキヤも、イラクを中心としたアッバース家のイスラーム帝国の中に組み込まれることとなった。しかし、それから半世紀後の800年には、アッバース朝の軍人であったアグラブの子のイブラーヒームが、同王朝のカリフの権威を認めながら自立を追求し、イフリーキヤに新たな地方王朝を建てた。これがカイラワーンを首都とするアグラブ朝である。このスンナ派の王朝は、ビザンツ帝国治下のシチリアへの軍事活動を積極的におし進め、9世紀の末には全島の征服を達成した。アグラブ朝などのイスラーム諸王朝の下で、進んだ灌漑技術や新たな農作物が導入され、また商業面の発展もあり、シチリアは一段と豊か

な島へと変貌していった。また、地中海の中央域で勢力を拡大したアグラブ朝は、一時、キリスト教の聖地ローマにも侵攻した。そして、この時代に、イフリーキヤではアラビア語とイスラームが支配的になっていった。

10世紀に入ると、アグラブ朝は、(D) 派の一分派であるイスマール派の教宣集団とベルベル人のクターマ族などから成る新興勢力の猛攻にさらされるようになり、909年に首都カイラワーンを失って滅亡した。こうして生まれた新王朝がファーティマ朝である。この王朝の君主はイスラームの最高指導者を自任し、⁽⁶⁾ アッバース朝のカリフ体制を全面的に否定してイスラーム世界に衝撃を与えた。かくして、アッバース朝、(C) 朝、ファーティマ朝という強大なイスラーム王朝が^{ていつ}鼎立する時代となったのである。豊かなエジプトの支配を熱望するファーティマ朝は、東方への遠征軍を何度も派遣し、ついに969年、⁽⁷⁾ ナイル川の灌漑農業地域を支配下に置き、新首都のカーヒラ(カイロ)を建設し、そこを王朝の新たな本拠地と定めた。そして、間もなくそこに中心的な礼拝の場として(E) =モスクを建てた。このモスクはイスマール派の教学センターとして機能し、12世紀後半以降にはスンナ派の教育・研究施設となったため、(E) 学院と呼ばれることもある。

11世紀末以降にシリアに出現した十字軍諸国家において中心的な位置を占めたイェルサレム王国は、1160年代に入るとエジプトに度々侵攻し、ファーティマ朝を危機に陥れた。この難局を救ったのが当時ザンギー朝のクルド人将軍であったサラディンである。彼は間もなくファーティマ朝の実権を握ると、カイロを首都とするアイユーブ朝を興した。サラディンはその後、シリアから北イラクへと領土を拡大し、十字軍国家を包囲する体制を築いていった。そして、この時代の北アフリカにあってアイユーブ朝に対抗したのが、イブン＝トゥーマルトのタウヒード(神の唯一性)の思想とベルベル人の軍事力を支えとして建国された(F) 朝であった。同王朝はモロッコ中南部のマラケシュを首都とし、東は⁽⁸⁾ リビアの西部にまで領土を拡大し、またイベリア半島のイスラーム勢力の領土のほとんどを支配下に置いた。しかし、レコンキスタ運動が強まるなかで、1212年のラス＝ナバス＝デ＝トロサの戦いにおける敗北を機に衰退に向かい、やはりベルベル人の王朝であった新興のマリーン朝に1269年に首都を奪われて滅亡した。

これに先立って、イフリーキヤでは(F) 朝の下で統治を担っていたハフス家が自立化の傾向を強め、同王朝の君主が1229年にイブン＝トゥーマルトの教義を否定したのをみて、正式に独立を宣言した。これがハフス朝である。チュニスを首都とするハフス朝は、その君主がカリフの称号を帯びるなどして正統性を主張し、1574年にオスマン帝国の支配下に入るまで命脈を保った。ハフス朝下のチュニスに1332年に生まれたイブン＝ハルドゥーンは、その長大な通史の序論部分に当たる『(G)』において、近代の社会科学を先取りするような独自の政治・社会・経済の理論を唱え、新たな境地を示した。学問・教育の盛んなチュニスやカイラワーンを擁したイフリーキヤは、イスラーム世界の知的な発展にとっても不可欠な地域であったといえるだろう。

設問（１）この島に生まれたナポレオンによって率いられたフランス軍が、エジプトの占領を開始した年は何年か、アラビア数字で記しなさい。

設問（２）この宗教の創始者のマニを重用し、「イラン人および非イラン人の諸王の王」という称号を採用したササン朝第２代の王の名前を記しなさい。

設問（３）フランスがマグリブの植民地支配に際して、その中心地域としたのはアルジェリアであった。このアルジェリアが長く熾烈な戦争の後にフランスからの独立を達成したのは何年か、アラビア数字で記しなさい。

設問（４）ミスルは征服時に軍事拠点とされた軍営都市を意味するが、イラク南部に創設されたミスルで、ペルシア湾交易の重要港へと発展した都市の名を記しなさい。

設問（５）アンダルス（イベリア半島のイスラーム圏）における中世イスラームの学術や文化の中心都市であったコルドバに1126年に生まれ、アリストテレス哲学の研究を深めて多くの優れた注釈書を著し、ヨーロッパの哲学に大きな影響を与えた学者のアラビア語名を記しなさい。

設問（６）モンゴル軍を率いてバグダードを征服し、アッバース朝のカリフ体制を壊滅させたチンギス＝ハンの孫は誰か、記しなさい。

設問（７）ナイル川の中流域に位置するヌビアに前920年頃に建国され、前８世紀にエジプトへ進出してテーベを都にエジプト第25王朝を建て、メロエへ遷都した後はメロエ王国とも呼ばれる古代王国の名称を記しなさい。

設問（８）1911年から1912年の侵略戦争を経て、リビアを植民地化したヨーロッパの王国の名称を記しなさい。

Ⅲ 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を記入しなさい。

後周の武将であった趙匡胤が建国した北宋は、唐末五代以来の武断政治の風潮を断ち切るべく、文官を重視して中央集権化をはかった。皇帝自らが面接を行う殿試による科举制度の完成も、君主権の強化を促進することとなった。形勢戸と呼ばれる富裕な新興地主層が科举制度による官僚の母胎となり、やがて儒学の教養を身につけた名士である士大夫層を形成していった。かくして文治主義による統治が推進されたが、対外的には契丹や西夏などの北方民族の圧迫に苦しみ、防衛費が増大して国家財政は逼迫した。やがて金の侵攻を受けて都の開封を陥落させられ、上皇の徽宗と皇帝の欽宗を北方に連行されるという未曾有の国難に見舞われて北宋は滅亡した。この事件を（ A ）という。江南に逃れた欽宗の弟は高宗として帝位につき、（ B ）を都として南宋を再興した。南宋では、武将の岳飞が金に対する徹底抗戦を唱えたが、金との和平を主張する秦檜によって弾圧されて獄死した。その後、秦檜の主導のもとで南宋は和平策を推進し、国境線を淮河に定めて、金に対して臣下の礼をとり貢ぎ物を贈ることによって和平を購った。

宋朝の南渡は漢民族にとって屈辱ではあったが、経済的な側面からいえば江南地方の開発が飛躍的に進む契機となった。中国の気候は淮河以南が温暖湿潤であり、とりわけ長江下流域には湖沼や河川が複雑に入りくむ湿地帯が広がり、農耕に適さない土地が多かった。そうした土地を堤防で囲い干拓することによって農地とする（ C ）は五代からつくられ、南宋にいたってさらに普及した。「蘇湖熟すれば天下足る」という言葉は、稲作面積の拡大による収穫量の増加により、経済基盤が華北から江南へと移行した現象を端的に示している。元朝の支配を経た後の明朝では、長江下流域の江南デルタ地帯は綿花や生糸の産地となり、穀倉地帯の中心は長江中流域へと移ったため、「（ D ）熟すれば天下足る」という言葉に取って代わられるが、いずれにせよ宋王朝の南渡以後、中国経済が南方の長江中下流域に負う比率は格段に大きくなったのである。

中国史上、長江以南に都を置きながら、北方の黄河流域までを版図におさめた国家は、明が初めてである。貧農出身で後に太祖・洪武帝となる（ E ）は、白蓮教徒による紅巾の乱の群雄割拠のなかから頭角を現し、長江下流域の穀倉地帯を支配下に置くと、南京を都として明を建国した。南京に都を置くという選択は、宋代・元代を通じた開発により江南の重要性が増したことを背景としている。そして都が置かれたことにより南京の政治的な重要性も著しく向上することとなった。その傾向は建国直後の科举にも顕著に表れており、及第者の多くは南方出身の知識人であった。（ E ）は国家の財政的・政治的基盤が江南に偏重することに苦慮し、北方出身者を抜擢したり、自分の息子たちを王として北方に分封したりするなどの対策をとった。しかし、二代目の建文帝の時代になると北方の諸王との軋轢が強まり、ついには北平（北京）の燕王、すなわち後の（ F ）帝が挙兵して都の南京は陥落させられた。建文帝は死に追い込まれて、新体制が推進されてゆくが、南京には反抗する儒教的知識人も多かった。とくに建文帝の信任が篤かった方孝孺は「燕賊篡位（燕国の盗賊が帝位を奪った）」と大書して非難したとも伝えられ、八百人以上の親族や友人を目の前で処刑されるという惨事も起こった。建文帝を殺したという汚名をこうむる新皇帝にとって、南京は都として

居心地のよい場所ではなかった。彼は華北に残存する元朝以来の諸民族の混在という状況に対応する必要もあり、即位すると南京から北京への遷都を決行した。

都は再び華北へと戻ることになったが、江南では引き続き産業の発達が進み、都市が発展した。貨幣経済の発展のもとで、官僚経験者であり地主として郷里に居住して地方行政に強い発言力を有する人々が明代後期に台頭した。彼らは（ G ）と呼ばれる。彼らや富裕な商人層を担い手とする豊かな都市文化が栄えた。庭園を築き、書画をたしなみ、喫茶の習慣が普及し、景德鎮の陶磁器や骨董の愛好家が増えるなど、都市の富裕層の娯楽は多様性をもって花開いた。木版印刷による出版業も隆盛期を迎え、科挙の参考書や商業・農業などの実用書が普及した。その一方で、娯楽のための書籍も数多く刊行された。宋代以来、都の盛り場では語り物や芝居が上演されてきたが、そうした民間芸能に端を発する様々な物語が白話（口語）小説として集大成されて多くの読者を獲得した。その代表的なものが『三国志演義』『（ H ）』『西遊記』『金瓶梅』であり、「四大奇書」と称せられた。伝統的な儒家思想の信条としては、怪異、暴力、反乱や戦乱、鬼神については積極的には語らないことが求められた。しかし明代にいたり、『三国志演義』は戦乱、『（ H ）』は暴力、『西遊記』は神仙、『金瓶梅』は不道德を高らかに謳い上げる物語として絶大な人気を博した。それらの書籍はまるで伝統的な儒教道徳の拘束から解放されたかのように、南京や建安といった南方の諸都市で続々と刊行された。こうした従来の儒教的な道徳観念にとらわれない爛熟した都市文化を思想面から強力に擁護したのが（ I ）である。彼は陽明学者であるが、儒教・仏教・道教に通じており、さらには中国最初の漢訳世界地図である「（ J ）」を作製したイエズス会の宣教師マテオ＝リッチとも南京で面会して交友関係を結んでいる。明末ならではの幅広い文化的視野のもとで、（ I ）は儒教の礼教主義にひそむ偽善性を鋭く批判し、赤子のような心こそが尊いとする「童心」説を唱えて、人間の欲望を積極的に肯定した。その理論は通俗文芸にも援用され、数ある書物のなかで『（ H ）』こそが最も尊い書物の一つであると評価するにいたったのである。ここに江南の文化的興隆は一つの極点を迎えた。（ I ）の思想と著作は後代に大きな影響を与え、日本でも彼の著作の一つである『焚書』を吉田松陰が獄中で読んで感動したという話が伝わる。しかし、（ I ）自身は鋭利な儒教批判のため、異端として投獄されて獄死するという末路をたどった。死後にも弾圧はやまず、その著作は清代にも禁書とされた。明末の江南に花開いた文化の先導者である彼が本格的に再評価されるのは、儒教的伝統が批判にさらされる五・四運動の出来を待たねばならない。

Ⅳ 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を記入しなさい。

古代のパレスチナ地方に居住していたイスラエル人は、元来羊や山羊を飼育する半遊牧民であった。その一部は、ヒクソス統治下の時代にはエジプトに居住していたが、新王国時代になると厳しい隷属下に置かれていた。イスラエル人は預言者モーセを指導者として、エジプトから脱出し、唯一神ヤハウェから十戒などの律法を授与され、「約束の地」に戻り、そこに定着し、12部族連合を成立させたとされる。「モーセ五書」と呼ばれる成文律法は、主にヘブライ語で記された『（ A ）』の重要な部分を占めている。ペリシテ人からの政治的・軍事的圧力を受ける中で、サウルがイスラエル人の初代国王として即位した。サウル王の死後に王国の支配権を掌握した（ B ）王は、エブス人の町であったイェルサレムを占領し、そこに契約の箱を置き、政治的な中心地にした。イェルサレムは、「（ B ）の町」と名づけられた。次のソロモン王は、交易ルートを開拓し、徴税制度を再編成し、荘厳な宮殿や神殿を築いた。この時代にイスラエル王国は、都市の発達と文化的繁栄などによって全盛期を迎えた。しかしソロモン王の死後、王国は南北に分裂し、北のイスラエル王国は、前722年に（ C ）のサルゴン2世によって滅ぼされ、（ B ）王朝を継承する南のユダ王国は、前586年に新バビロニアのネブカドネザル2世によって滅亡させられた。上層階級を中心とした多くのユダヤ人は、強制的にバビロンに移住させられた。アケメネス朝ペルシアの王（ D ）によって、バビロン捕囚から解放された後、ユダヤ人はイェルサレム東南部のシオンの丘に神殿を再建し、ネヘミヤやエズラなどを中心にユダヤ教の復興に努めた。アケメネス朝ペルシア滅亡後ユダヤ人は、ハスモン王朝期を除き、プトレマイオス朝エジプト、セレウコス朝シリア、ローマなどの外国勢力の統治下に置かれた。皇帝ネロの支配に対して蜂起したユダヤ人は、第一次ユダヤ戦争でローマ帝国に敗北し、後70年にイェルサレムは陥落し、その神殿もティトゥス将軍の軍隊によって徹底的に破壊された。

こうして多数のユダヤ人は、ディアスポラの民として各地で離散して生活することとなった。のちにヨーロッパのユダヤ人は、スペインなどの地中海世界に居住したセファルディムと、ドイツ、北フランス、東ヨーロッパなどに住み着いたアシュケナジムに大別されるようになる。ユダヤ人は、西ゴート王国やメロヴィング朝からの迫害を受けたものの、（ E ）朝のルートヴィヒ1世（敬虔王）が、9世紀前半にユダヤ人を保護する政策を実施したことに見られるように、11世紀まではユダヤ人とキリスト教徒との関係は、比較的平和共存の状態であり、期限付きで市民権を有するユダヤ人も存在していた。しかし、11世紀末には宗教的な排他思想や異文化に対する偏見が高まり、十字軍の活動はヨーロッパでも遠征先のパレスチナでも、ユダヤ人に対する暴力的な行為を伴う迫害をもたらした。インノケンティウス3世が主導した第4回ラテラン公会議（1215年）で、ユダヤ人には特定の記章の着用が義務づけられ、公職に就くことが禁止された。各地でユダヤ人は、土地所有を禁じられ、手工業ギルドから閉め出され、厳しい職業制限を受けたので、都市の中で金貸し、両替商、古物商に従事するユダヤ人が増加していった。教会法によって利子付きの金貸しが禁止されていた中世社会において、ユダヤ人の中に金融業で財産を築いた者が見られた。またペストが流行した14世紀中頃から、ヨーロッパ各地でユダヤ人に対する不寛容な態度がさらに強まり、ユダヤ人は井戸の中に毒を

混入させたという嫌疑をかけられ、財産を奪われ、殺害され、都市から追放された。ペスト沈静後にユダヤ人が以前の居住地に帰還しても、彼らには過去の債権の請求が許可されることが多かった。各地のユダヤ人は、キリスト教徒とは切り離されて生活し、のちに「(F)」と呼ばれる集合居住地区に住まわされた。そこでユダヤ人共同体は、シナゴグを中心に律法に従って運営された。

王権によるユダヤ人追放政策は、イングランドでは1290年にプランタジネット朝のエドワード1世によって、フランスでは1306年に(G)朝のフィリップ4世によって実行に移されていた。イングランドにおけるユダヤ人の入国は、オリヴァー＝クロムウェル統治下の共和政時代まで、公には認められなかった。それに対して中世のイベリア半島では、『(A)』を聖典とするユダヤ教、キリスト教、イスラーム教という三つの宗教が共存する社会が形成されていた。しかしここでもユダヤ人の状況は次第に悪化し、カスティリヤ女王(H)とその夫フェルナンドは、教皇シクストゥス4世からの許可を得た上で、1480年にセビリヤに異端審問所を創設し、それを社会的・政治的統制の手段として用い、レコンキスタを完了させた直後の1492年に、ついに「ユダヤ人追放令」を公布した。それによってユダヤ人は、4ヶ月の猶予期間をもってキリスト教への改宗か国外退去を迫られた。ユダヤ教からの改宗者であるコンベルソは、「新キリスト教徒」と呼ばれていたが、その中にはなおもユダヤ教を信じているのではないかと疑われる者が散見された。(I)の時代のスペインでは、トリエント公会議を契機とした宗教的不寛容の高揚とともに、カトリックによる国家統合を目指した政策がとられ、厳しい異端審問制度の実施によって、イベリア半島に居住していたコンベルソなどの少数派に対する国家統制が浸透した。国王の(I)は、即位直後の1556年に祖先がユダヤ人やイスラーム教徒であった者を、大学や各種団体から排除する血の純潔規約を容認した。これによって信仰の純粋性だけでなく、人種的な差別に依拠した血の純潔性が求められ、社会内部の緊張が高まった。この時期には、先祖からキリスト教を信じる家系に属する「旧キリスト教徒」が尊重された。

ポルトガルのマヌエル1世は、15世紀末に「ユダヤ人追放令」を公布したものの、ユダヤ人が経済的に重要な役割を担っていたので、キリスト教への改宗を促し、国内に改宗ユダヤ人を滞在させようとした。ジョアン3世の時代に異端審問所が設立されると、多くの改宗ユダヤ人は、ポルトガルからオランダやオスマン帝国などの国外に流出した。

北方ルネサンスの進展とともに、古代文化への関心が高まる中で、ドイツの人文主義者ロイヒリンは、ユダヤ教思想の原典の保存・研究に努め、1506年にはヘブライ語の文法書を刊行し、キリスト教世界におけるユダヤ学の端緒を開き、『(A)』の言語研究の土台を築いた。ロイヒリンの親ユダヤ的な態度は、ケルンのドミニコ修道会などの保守的な権威主義者との衝突をもたらし、激しい論争を引き起こした。亡命ユダヤ人の末裔から、多くの優れた文化人や科学者が輩出された。『エッセー（随想録）』を著したモラリストである(J)の父方の家系は、ボルドー周辺に住む新興の地方貴族であったが、彼の母はスペインから亡命したコンベルソの子孫であった。17世紀にオランダのユダヤ人家庭に生まれた哲学者スピノザは、『神学・政治論』で宗教の本質を隣人愛の実践と見なし、個人は宗教上完全な良心の自由をもっており、たとえ人々の間に見解の相違が生じたとしても、良心の自由が容認されるべきだと主張した。移動と移住を強いられたユダヤ人は、金融や交易を通じた国際的なネットワークを形成し、仲介者として思想や文化の伝播に貢献したのである。